



令和元年度第2回 刈谷市国際化・多文化共生推進委員会 議事録

■ 日 時 : 令和2年3月16日(月) 10:00~11:30

■ 場 所 : 刈谷市役所301会議室

■ 出席者

団体名	役職等	氏名
愛知淑徳大学	名誉教授	榎田 勝利
国立大学法人 愛知教育大学	学生・国際課国際交流室長	三浦 秀樹
刈谷市教育委員会 学校教育課	指導主事	濱口 留美
愛知県国際交流協会 交流共生課	課長	小山 豊三郎
刈谷市国際交流協会	常務理事兼事務局長	丸山 靖司
一ツ木自治会代表		及川 啓太
株式会社ベルテック	取締役専務	小池 ソニア
認定特定非営利活動法人 アジア車いす交流センター	事務局長	熊澤 友紀子
市民委員		麻生 いづみ
市民委員		王 平
刈谷市役所 市民活動部	部長	西村 日出幸

■ 欠席者

団体名	役職等	氏名
株式会社豊田自動織機	人事部グローバル人事室 海外勤務グループ長	小林 美保

■ 事務局

所属	補職名	氏名
市民協働課	市民協働課長	石川 領子
市民協働課	課長補佐兼地域支援係長	藤井 昭仁
市民協働課	協働推進係長	酒井 武士
市民協働課	主事	加藤 祐騎
市民協働課	主事	西村 亜津

■ 配付資料

議事次第、委員名簿

- 資料 1-1 第3期重点協働プロジェクトの進捗状況
- 資料 1-2 カリヤ・シンチャオ（案）
- 資料 1-3 ESDパンフレット（案）
- 資料 2 日本語支援団体連絡協議会について
- 資料 3 刈谷市初期日本語教室の実施について

■ 議事録

開会

- ◇ 配付資料について確認した。
- ◇ 出欠状況を説明し、委員会が成立していることを報告した。
- ◇ 委員長が以下のとおりあいさつを行った。

新型コロナウイルスの感染拡大で話題となる中の会議開催で大変恐縮ではあるが、長い間皆様のご協力のもと、ご意見をいただいているこの委員会は大変意義がある。世間は新型コロナウイルスの関係で市民生活や経済活動で大変な状況にあるが、とりわけ地震や洪水などの災害の他、今回のような新型コロナウイルスなどの災害でどのように市内の外国人への対応がなされているか心配である。自治体国際化協会のHPでは、新型コロナウイルスに関する在住外国人のためのポータルサイトを作って情報をアップしているので、また確認してほしい。

刈谷市だけでは多文化共生を推進することは難しいところがある。是非忌憚のない意見をお願いしたい。

1 議題

(1) 第3期重点協働プロジェクトの進捗状況

- ア 共生の地域づくり発展プロジェクトについて
- イ 外国人市民の参画と共助プロジェクトについて

- ◇ 事務局が、資料1-1、1-2に基づき、共生の地域づくり発展プロジェクトと外国人市民の参画と共助プロジェクトについて説明した。
- ◇ 委員長の進行により、質疑応答、意見交換を以下のとおり行った。

委員長：共生の地域づくり発展プロジェクトに関して意見などあるか。課題としては継続する仕組みが必要とのことだが、継続して参加する外国人はほとんどいないのか。

事務局：少数いるが、その母数が増えていかない。

委員：一ツ木地区運動会について、一ツ木地区以外の外国人の方は対象外か。

委員：一ツ木地区の住民に向けた運動会である。参加外国人は、一ツ木地区の企業に務める外国人実習生であり、在勤ということで参加してもらった。地区の中でも各チームがあり、在住の外国人は、地区のチームで参加しているかもしれないが、そこまでは把握していない。

事務局：ワールドデンは「多文化共生チーム」として参加している。

委員長：ワールドデンは、一ツ木地区の中でどれくらいの認知度があるのか。

委員：地区役員にはある程度知られており、様子を見に来てくれたりする。住民への認知は、体感として50%程度。子育て世代の親には興味を持ってもらっているが、その方たちに、認知度をどう上げるかが課題である。

委員長：ワールドデンの継続や他地域への展開に対して意見はあるか。

委員：月1回の合同作業に関しては、日本人も外国人も積極的な印象である。継続的な参加に関する課題については、地域の外国人や留学生に対しては、なかなか継続的な参加に繋がらないのが残念。イベントに関しては、時期により内容をメンバーで考え実施している状況。あとは外国人が増えてもらえる仕掛けを考える必要がある。

委員長：市内の自治会や他市からのワールドデンについて問い合わせはあるか。

事務局：市内の自治会からは無いが、市外、県外の大学などから調査としてのワールドデンを取り上げてくれることはある。

委員長：愛教大留学生に対してワールドデンへのお誘いがあったがどうか。

委員：最初は全体で公共バスを活用して参加したが、継続的に行くことを考えると公共バスの時間帯の便が悪い事情もあり、自力で参加することが難しい。

委員：参加してもらった人たちに対して、LINE等で合同作業があるという周知があると良い。第三週目と決まっているが、たまに違うときがある。合同作業の前には、作業の具体的な内容など案内できると、参加しやすくなると思う。

委員：南部地区の説明を詳しくしてほしい。南部地区の人の問題、営農組合との関係など。

事務局：イベントをきっかけにしてという想定で始めていく予定であったことから、具体的に地域の人への説明はできていない。南部地域のほくほく畑は、外国人が多く住む集合住宅が近くにあり、まずは畑と一緒に耕してみるといったイベントのような形式で企画した。地域への理解と、作業を実施していくのと、どちらが先かといった部分はあるが、慎重に進めすぎてもなかなか進んでいかないため、並行して実施していった方が良いのではないかと考えている。

委員：南部を進めているとのことだが、他の地域に住んでいる人がこのような行事に参加したい場合はどうしたらよいのか。

事務局：基本的には地域の多文化共生を目的にしているが、ワールドデンでも他地域から来ている日本人、外国人もいる。近隣地域の方でも興味を持って参加してもらえるのは大歓迎である。

委員：他地区への情報展開ができていないのでは。あまり人が多く押し寄せてはいけませんが、活動の広がりを考えるのであれば、他地区への情報展開が必要ではないか。

参加者数が増えてしまって管理側が大変になることは考えないといけないのだが、さまざまなつながりを考えれば広く告知をすると良いと思う。

委員：情報展開に関して、LINEのQRコードをつくりワールドデンの周知ができると良い。留学生はほとんどLINEを使っている。

委員長：本来は一ツ木地区住民と外国人住民の関わり合いといったことが目的であった。行政側と

してはこの活動はモデルであるため、他地区へ広がる方策を考える必要があるのではないか。他地域の自治会の方々に対してこの活動を知ってもらうためには、参加してもらうことが一番ではあるが、そのあたりの方策を考える必要があると思う。外国人にとって魅力があり、参加したいものであるのかを考えないといけない。結局動員という形になってしまってもいけない。

委員長：外国人の参加共助プロジェクトに関して何か意見はあるか。ベトナム人の呼びかけはどのように声掛けしたのか。

事務局：日本語教室の学習者に声をかけ、人づてに集めていき、知らない人同士が参加できるような形をとった。

委員長：フィリピン、ベトナムコミュニティの参加にあたっては会費制か。

事務局：フィリピンは会費を取ることはしたくないと言っている。ベトナムは会費を取る考えでいる。

委員長：会費がないのならばフィリピンのイベントなどはどうやって実施したのか。

事務局：メンバーが勤めている企業や知り合いの店などに、自分たちで協賛を募りイベントを実施した。

委員長：フィリピンは、団体として自立しているみたいだが、行政はどのような関りをしてきたか。相談するに乘るような関わりか。

事務局：団体を設立するまでは、ミーティングを一緒に行ってきた。

委員長：中部フィリピン協会は一昨年まで任意団体であった。その後一般社団法人になったが、その代表がどのように団体をつくれればよいか分からないとの声があった。そのような相談先として行政がアドバイスなどできると良い。

事務局：会則の作成はミーティングの中で市が協働して一緒に行った。

委員長：フィリピン人、ベトナム人の配偶者は日本人が多いのか。

事務局：フィリピン人は配偶者が日本人である場合が多い。ベトナム人はベトナム同士が多い印象である。

委員長：フィリピンのコミュニティは日本人配偶者も参加しているか。

事務局：現在はしていない。

委員：子どもたちにベトナム語（母国語）を教えることについて、どちらが母国語になるか分からないが、親の気持ちとしてはどの国の人も自分たちの第一言語を教えたいという気持ちがあるため母国語の教室はいいきっかけになる。市が行っているイベントでも、外国語教室でも外国人の子どもたちに参加してもらうことで、参加者同士の新たな交流が生まれる。親たちがボランティアでもきっとやりたいと思っている人はいると思う。子どもの外国語の日などを設け、それを固定化することで定着につながる。また、ワールドで収穫されるものはサツマイモだけか。

事務局：他にも作っている。

委員：収穫期間が短いものは作っているか。

委員：収穫まで期間が短いものとして葉物は作っているが、収穫の際には季節ごとにイベントに絡めて収穫することになっている。

委員：日々の生活に必要な野菜を常に手に入れられるようになれば、もっと集まるのではないかな。

事務局：月1回の合同作業以上に作業があるとワールデン側に負担になるので、今は作業に合わせて収穫できるものになっている。

ウ ESD推進プロジェクトについて

◇ 事務局が、資料1-1、1-3に基づき、ESD推進プロジェクトについて説明をした。

◇ 委員長の進行により、質疑応答、意見交換を以下のとおり行った。

委員：講師を経験した感想として、講師として声をかけてもらったとき、2限分の授業を一人で行うような認識でいたが、3分の2ほどはファシリテーターが進行し、内容としてもSDGsを学ぶという軸があったため、講師としてそれに沿って活動紹介やキャリア経験などの説明をすることができ、とてもやりやすかった。それを前提に講師依頼をすれば企業の方、市民の方が気軽に引き受けてもらえるのではないかな。また、4クラス合同という条件であったので実施する学校に制限があったようだが、人数にこだわらず、このメニューを多くの学校に広めていくことを重点に置いて様々な形式で行うと良いのではないかな。

事務局：過去に3クラス合同で遊びや踊りをテーマとしたプログラムを体育館で実施したこともある。他のプログラムに関しては、グループワークの場面があり、少し合同では実施しにくい。今回富士松南小学校からの依頼に関しては、学校との調整の上、4クラス別々で実施したいといった意向もあったため、実施することが難しかった。

委員長：講師、ファシリテーターがあまりいない状況なのか。

事務局：ファシリテーターもセットで派遣するような形式となっている。講師とファシリテーターを4人派遣することが難しく、断念する状況になってしまった。

委員長：ファシリテーターを4人派遣できなくても、少し工夫すれば実施できると思う。講師はどの程度リストアップしていかな。

事務局：多くは愛教大留学生を講師としている。

委員長：刈谷市は国際的都市であり、海外経験をした人が沢山いる。現役で働いている人たちへは難しくとも、引退した人たちに声をかけていくことも考えると良い。留学生も忙しいと思うが関心はあるのかな。

委員：教員研修留学生といって、各国の先生が1年～1年半日本の教育を勉強し、自国に持ち帰ることを目的としている。このような学生は日本の教育現場を見る良い機会となっている。

事務局：留学生の方には講師としてやってよかったという意見をもらっている。海外赴任経験者などは講師として不足している部分である。

委員長：AIAでは以前ファシリテーター養成講座を実施していたと思うが。

委員：以前は実施していたが、現在は実施していない。

委員長：教員でこのようなことに関心がある人たちにお問い合わせすると良い。教育委員会との調整し研修等を開催したうえで、人材育成をしていかなければ、人材不足の問題は解決しない。

事務局：実際には、プログラムの内容でもう少し細かい内容が記載された、実施者用のプログラムがある。プログラムは作成済なのでそれを読めばファシリテーションができるように想定されており、次年度から自分の学校で実施することはできる。学校内でも実施できるような形として、準備も進めている。

委員：先生は日々授業をしているので、外部から講師に来てもらうことも良いことである。市役所の人でも良いと思う。

委員長：経験に裏打ちされていることが一番良い。講師へアプローチの方法を検討して欲しい。刈谷北高校の生徒は3年間勉強をするなら、彼らがファシリテーターとなってもらい、小学校などで国際経験を発表してもらえると大変意義がある。国際教養科の生徒と地域を結び付けていく仕組みがあると良い。講座を受けた国際教養科の生徒が教えられるようになったり、ワールドデンに参加してくれることで大きな変化が生まれると思う。単体で考えず、そのような結び付けをつけていくと良い。

(2) 日本語支援団体連絡協議会について

◇ 事務局が、資料2に基づき、日本語支援団体連絡協議会について説明をした。

◇ 委員長の進行により、質疑応答、意見交換を以下のとおり行った。

委員：刈谷市国際交流協会の日本語教室の課題として、市外の学習者受入解消とあるが、外国人コミュニティは市で区切られていないため、市外の外国人を拒むことが難しい状況である。そういった部分で近隣市町村と連携が必要。学習者の情報の管理もどこまでやればいいのかも課題。個人情報あまり聞かないから来てくれることもある。

委員：日本語教室に来ているのは成人以上か。

委員：子どももいる。

委員：ベトナムコミュニティが母語教室をしたいといった意見もあったが、日本語教室内で親子をターゲットにすることができるのではないかと。また、近隣の大学に日本語教育を学んでいる人はいるがボランティアとして関わりたい人たちもいるかと思うが、そういった人たちも巻き込んでいけると良いのではないかと。

委員：ボランティアの学生が学校に行って外国人の子どもを支援している。

事務局：愛教大のリソースルームは各小中学校に学生ボランティアを派遣して、勉強を教えるという活動をしている。SSSとの活動と重なる部分もあり、SSSからはボランティア不足といった意見もあるため、リソースルームと連携していけると良いと思っている。刈谷市として、ボランティアが中心となり日本語教室に関する取り組みは充実している方であると思う。近隣市で実際に稼働している日本語教室が少ない現状があるため、交通の便が良い刈谷市の日本語教室に来ている状況である。なおかつ刈谷市の行う日本語教室が非常に質の高いものであり、日本語検定も受けられるといったこともあるため、自然と刈谷市の

日本語教室に人が集まってくる。これは刈谷市だけの問題と考えず、近隣市と連携をとって、ともに日本語教室のベースアップが図れればと思っている。

委員長：教育の場ではどうなっているのか。

委員：地区ごとで外国人の人数が違い、かりがね地区や富士松南地区で外国人が多くなってきている。プレスクールを設けることやリソースルームに依頼して学生ボランティアを学校に派遣してもらっている。

委員長：専門家を雇っているのか。

委員：雇っていない。普通の教員が日本語を教えている。ある程度日本語がわかる子どもだと教えやすいのだが、全く日本語が話せない子どもだと最初は大変である。しかし、子どもの修得は早いので子ども同士でコミュニケーションをとっている間で、日本語を聞き取れるようになる。

委員長：父兄への連絡の様子はどうなっているか。

委員：語学指導員にお願いしている。今回のコロナウイルスの関係も、語学指導員に翻訳をお願いしたり、個別に連絡を取ってもらった。

事務局：かりがね地区ではフィリピンの子と先生のコミュニケーションがうまくできないという相談があったことに対してフィリピンコミュニティの方が解決してくれた例はある。

委員：刈谷市の日本語教室へ他市から来ているとのことだがどこの市から来ているか。

事務局：高浜市が一番多い。知立、東浦からも来ている。

委員：刈谷市と他市の割合はどのくらいか。

事務局：刈谷市が5割、他市が5割と聞いている。

(3) 刈谷市初期日本語教室について

◇ 事務局が、資料3に基づき、刈谷市初期日本語教室について説明をした。

◇ 委員長の進行により、質疑応答、意見交換を以下のとおり行った。

委員長：補助金は愛知県から出るのか。

事務局：そうである。文化庁からの補助金をふまえて愛知県が定めている。

委員長：補助金は単年度事業か。

事務局：決まってはいるが、3年から5年と推測している。

委員長：その間にコーディネーターなど養成ができると良い。

委員：ほとんど日本語ができない方への教室とあるが、今までそういった方の受け入れをしていないのか。また、ニーズはあるのか。

事務局：受け入れをしてこなかったということではない。この初期日本語教室は昨年度から愛知県がモデル事業として一宮市で実施し、今年度は刈谷市で実施したものであるが、これまでの文法積み上げ型で支援していたボランティアがこの対話型でも実施してみて、地域で必要となる会話やコミュニケーションといった部分では非常に有効であり、対話型の方が話すことに関しては習得が速いのではないかとこの意見があり、協力してくれたボランティア

からも継続して実施して欲しいとの意見もあったことから、来年度以降も実施するという形に至った。

委員：刈谷市日本語教室と初期日本語教室の両方を平行して受け入れることはできるか。

事務局：可能である。初期日本語教室から刈谷市日本語教室へつなげられると良いと思っている。

委員長：最後に一人ずつ意見を。

委員：フィリピン、ベトナムコミュニティについて、刈谷市の対応はとても良いと思った。

委員長：刈谷市にブラジルコミュニティはあるか。

委員：ブラジルはSNSでの繋がりのほうが多い。集まる場としては、教会関係が多く刈谷市民には限らない。教会にはフィリピン人や韓国人もいる。

事務局：調べた中ではないので、次のコミュニティの国として検討している。ブラジル人の中には20年以上日本に住んでいて、今から日本語を学ぶという人を何人も見ている。

委員：ワールドデンに参加してもらっても継続につながらない。自発的に参加してもらえる工夫が必要。日本人とのつながりを持ちたいと考える外国人の親たちや子どもたちが気軽に接していける仕組みが必要である。今まで市民協働課が協力してきたが、今度は地区から情報を発信していければと思っている。

委員：ベトナムコミュニティについて、刈谷市内で増えているので必要かと思うが、市役所内でのベトナム語の相談員を設けるなど、市内でのベトナム人への対応も注力してほしい。

委員：外国人コミュニティ形成の取り組みは県内でも先進的な取り組みである。これからも続けてほしい。日本語教室については、市によって考え方に温度差がある。本来なら必要性がある市でもしっかりと対応してくれているわけではない。A I Aでは外国人から相談を受けているが、新型コロナウイルスの関係で相談件数が先月は少なかったが、先週から増え始め、健康相談が多い。保健所と連携をとったりして適宜対応している。A I Aでも初期日本語教室と養成講座を実施している。初期日本語教室については、日本語レベルの高い人にも来てもらっており、そのような人にも効果がある。

委員：4月になると学校側が年間計画を立ててしまう。急に授業に差し込むことはできないため、早い段階でパンフレットなどを提供してほしい。

委員：刈谷市は外国人が増えていって、これから子どもたちへのSDGsなどの教育が必要になっていくと思っているので協力をしていきたい。

委員：外国人コミュニティの取り組みは、会則まで作っており、将来的にもしっかりと独立した団体になるのではないかと思います。また、月1回ミーティングをしても10人以上集まるようなコミュニティであるということはニーズがある証拠だし、それを市がバックアップをしていることは他ではなかなかない事例である。LINEページは情報発信ツールとして大変有効であるため、ワールドデンや日本語教室で有効だと思うので、是非活用してほしい。

委員：あいかりというツールが既にあるので、それらを活用してワールドデンなどの情報発信や情報交換ができると良い。市民だよりを見ないような人たちへもアプローチできる。また、永住権を持っている外国人の知り合いがいるが、将来的には外国人の高齢者という存在も

出てくる。日本人向けのサロンなどがあるが、外国人へもサロンを立ち上げたりして外国人を支えてあげればと思っている。

委員：中国人はウィーチャットが一番多い。その国々に応じたSNSを知らないと有効なアプローチができない。新型コロナウイルスの影響で一斉休校となったときの案内文で中国語翻訳が間違っていることがあった。そういったチェックを頼まれれば協力するので教えてほしい。

委員：多文化共生は大事な視点になると認識している。いろいろな視点があると思っている。お知恵を今後もお借りしたい。

委員長：キーワードは「コラボレーション」。ワールドデンも団体との連携・協力体制が少しずつできてきた。「子ども」もキーワードである。子どもが参加すれば大人たちを巻き込める。多文化共生は難しいことであり、個々に違う文化があるため、きめ細かな対応が必要。1人ひとりに合ったサービスを提供することが必要。今後も各委員のそれぞれのお知恵をお借りできればと思う。

◇ 委員長が、閉会を宣言して終了した。